融合文化研究　第１号　p.64-69　　September　2002

懐徳堂精神に学ぶ
Learning from Spirit of Kaitokudo

安田　保
YASUDA Tamotsu

In the 18th and 19th centuries a school existed in Osaka called “Kaitokudo”. It was established by merchants and remained in operation for about 150 years. All students were equal when they were at lectures in the school. Most of them were merchants, but their purpose of studying was not for making money. They learnt many subjects and increased their knowledge in a variety of areas. They tried to improve themselves and return their knowledge to the community. People living in the 21st century can learn from their spirit. It could help us to create a better world.

江戸時代中期より明治まで150年間近く続いた学校が大坂にあった。名を『懐徳堂（かいとくどう）』と言う。一般には幕末、明治維新に活躍した人物を輩出した『適塾』の方がよく知られているが、懐徳堂の方がその歴史は古く、適塾が主に日本全国から集まる武士を対象とした学校であったのに対し、懐徳堂は大坂町人により設立され、身分に関係なく多くの門人が学んだ。大阪町人が目指したものは、自らを向上し、個人のアイデンティティの確立を目的とした学問であった。彼らが、21世紀を生きる我々に残したメッセージはいかなるものかを考察してみる。

１.時代背景

元禄期に文化が成熟した背景には、米相場を中心とした経済の好景気があった。しかし、元禄バブルの崩壊後、幕府財政は貧窮していく。そこで幕府がとった政策は、大名に金を貸すほどの力を持った大坂商人を封じ込めることであった。その名を淀屋橋（大阪市北区）に留める豪商淀屋は、1705年全財産を幕府に没収された（淀屋の闕所（けっしょ））[1]。処分の理由は

町人の身分に過ぎた奢侈の振舞いと言われているが、諸大名が淀屋から莫大な金額の借金をしていたのは事実であった。「享保の改革」では、「相対済令」[2]が制定され、奉行所は金銭貸借の訴訟を受け付けなくなった。これにより借金の踏み倒しを恐れた商人は、貸し渋りを行ない、経済は逼迫することとなった。貨幣の発行権を持つ幕府は、貨幣改鋳により、金銀の含有率を下げ、財政を一時的に立て直した。1711年に発行された銀の含有率は最も金銀の含有率が高かった慶長小判と比べると、その20%であった[3]。この政策は結果的にインフレを招いたが、通貨の流通量が増え、大坂の経済には利益がもたらされた。しかし、次の時代の新井白石は、「貨幣の質を落とすことは、幕府の権威も落とすこと。」と考え、正徳金銀の品質を上げる政策をとる[4]。それは、今まで通用していた銀貨幣4枚で新しい銀貨幣1枚と交換する計算になり、極端な通貨収縮を招くこととなった。さらに追い討ちをかけたのが、将軍吉宗がとった米に関する政策[5]であった。江戸時代は米本位制であり、武士は扶持を米でもらい、それを金に替えて生活していた。しかし吉宗が、新田開発と年貢率を上げることで幕府財政の立て直しを図ったことにより、市場に米が余るようになり、米価が下がった。この政策の失敗を幕府は、大坂町人に押し付け、余剰米60万石を強制的に買い取らせ、その代金を町人から吸い上げた。[6]ここまで徹底的に商人の力を抑える政策が施行された背景には、「賤商観」があった。安く仕入れた商品を高く売るという当り前の商行為が、不道徳であると考えられていた。

幕府の政策失敗のつけを押し付けられ、世間からは不道徳というレッテルを貼られた大坂町人は、幕府の非を責めるだけでは何も解決しないと考えた。彼らは将来を見据え、社会、世界を認識し、文化的価値の上に町人の地位獲得を目指し、その目的を達成する手段として学問を選んだ。中国での学問は科挙制度に合格する為のものであるが、日本では町人が学問を修めたところで、政治に加わることはなかった。しかし個人、町人としてのアイデンティティ確立の為、人々は学問をこころざし、懐徳堂は設立されることとなった。

２．創設

懐徳堂は、享保九年（1724)、大坂の尼崎町（現・中央区今橋）に創設された。設立は「五同士」と呼ばれる有力町人5人が発起人となった。五同士は毎月掛け金を行ない積み立てた基金を商人が運用し、その利息を学校の運営費にあてた。懐徳堂が優れていた点に、教育部門と運営部門を完全に分離していたことがあげられる。運営部門の責任者は、預人と

呼ばれ、運営に関する交渉事を担当し、教育部門の責任者、学主（がくしゅ）は教育のみに専念することができた。

講義は四書五経[7]などを主とすることを定めているが、初代学主の三宅石庵（みやけせきあん）(1665-1730)は、陽明学系であり、朱子学も説いている。石庵は諸学説が合わなくても、並び行われて害がなければ良いとし、諸学の良いところを積極的に取り入れた。この学風が後に、天文、地理、経済、宗教までも教える高い知的水準の学校となる。

懐徳堂の定書（学則）[8] は当時としては斬新な考えの下に定められていた。

一．学問は忠孝を尽くし職業を勤むる等之事にて候、講釈も唯右之趣を説すすむる義に候へば、書物不持人も聴聞くるしかるまじく候事。
但し、叶はざる用事出来候はば、講釈半ばにも退出之有るべく候。[9]

学問の目的が職業活動の前提としての「忠孝」であり、講義もその主旨を説き進める事が重要であるから、書物を持たない者も聴講して良いとした。これは、現在の公開講座と言えよう。また、やむを得ぬ用事があれば、途中でも退出して良いとしたのは、忙しい町人への配慮であり、仕事を持った者にも学問の機会を与える生涯学習の原点である。

一．武家方は上座と為すべく候事。
但し、講釈始まり候後出席候はば、其の差別之有るまじく候。[10]

席次については、町人中心の講義であったが、武士の聴講も考え身分社会に配慮し、上座に置くと定められたが、後に下記のように改められた。

一．書生の交は、貴賤貧富を論ぜず、可為同輩事。
但し大人小人之弁は可有之候、座席等は新旧長幼学術の浅深を以て、面々可被致推譲候。[11]

入門の新旧、長幼、学術の浅深を考え、席を譲りあい、職分、身分、貧富を問わず平等であるとした。身分制社会の時代にありながら、このような考え方ができたのは画期的であった。

受講料は、銀一匁か二匁（現在の約¥2,000～¥3,000）を年に５回納めると定め、講師方

への個別の謝礼は無用としている。また、受講料は、礼を尽くしている気持ちを表す為のものであるから、貧しい者は、紙一折・筆一対でも良いとしている。資産、身分に応じて、裕福なものは多く納めれば良いのであるが、そうすると貧しい者が出席しづらくなると言う配慮をもって、この受講料の規定が作られている。[12]

３．三宅石庵の講義

石庵が門人に宛てた書簡に、彼の考え、教えがよく現れているものがある。近頃、義理と人情が一致しないことに疑問を感じると言う門人の問いに､石庵は｢いつれの時いつれの地いつれの人、いつれの事にても、むかふかた、あふところなりに道あるものにて候、義理をはなれたる人情なく、人情をはなれたる義理もなく候、只、けふの我身の心のたけをつくして、行ひ候へは、人情、義理ともに其中にあるものにて候。｣[13] と応えている。 義理と人情が対立すると考えるのは本当の義理・人情が分かっていないからである。いつも相手のことを考え、その時、その場において相手に対して自分ができる精一杯のことをすれば、義理と人情は一致すると説き、例として、ひどく酔っ払った者に、飲みすぎてはいけないと説教しても、そのような状態の者には意味がない。その者を介抱し回復させてやることがまずすべきことで、回復してから説教をすれば良いと教えている。また、儒家思想では対立すると考えられる｢利｣と｢仁義｣についても柔軟な思考を展開し､｢仁義の実践者には結果として｢利｣がついてまわり、｢利｣そのものに害はないが、それを追求する過度の欲望が弊害を生む｣。[14] と説いている。

４．その後の懐徳堂

設立から２年後、懐徳堂は幕府の官許を得て、官許学問所となった。[15]　町人が自主的に設立した学問所が官許となることに矛盾を感じずにはいられないが、官許を実現した中井甃庵(1693-1758)には考えがあった。幕府から用地を拝領することにより、懐徳堂の敷地は公地となり、町政の管轄を離れ、諸役を免除される。懐徳堂が公共の場となることで、そこで交わされる言論は公のものとなり、思想と言論の自由が守られた。

官許学問所となった懐徳堂は、富永仲基(1715-1746)、山方蟠桃(1748-1821)ら優れた町人学者を輩出。寛政期頃には江戸の昌平黌をしのぐと言われる学問所に発展し、日本全国より知識人が集まるようになった。天明八年（1788）には、老中松平定信が来阪し、中井

竹山(1730-1804)を招聘して政務を諮問した。竹山の『草茅危言』[16]は、定信の寛政の改革に大きな影響を与えたと言われる。

享保九年に設立され、大坂町人により維持されてきた懐徳堂も幕末動乱の影響を受け、明治2年にその終焉をむかえる。しかし、約150年間にわたり懐徳堂で蓄積、発信されたものが社会に与えた影響は大きく、その精神は、近代日本へと引き継がれた。

５．懐徳堂の精神を現代に

懐徳堂創設時の時代背景は、我々が現在置かれている状況と似ている。我々は実態の無い好景気に我を見失い、利益を求め続けた。バブル崩壊後、景気が低迷、国家の財政が逼迫し、新世紀を迎えた今もその後遺症に悩まされ、景気回復への道を模索している。我々がすべきことは、ただ失政を非難し、新たなバブル景気の到来を待つことではない。今こそ我々は懐徳堂の精神に学ぶべきであろう。懐徳堂に学んだ大坂町人は、商売と学問を別のものとは考えなかった。学問により自らの教養を高め、得た知恵・知識を社会に還元すれば、自然と利益がついてくると考えた。あらゆる文化を理解し、取り入れようとする柔軟な考えを持ち、先人の教え、新しい時代の考えにも耳を傾ける。社会に変化を期待するのではなく、自分を変え、自分で変えて行かないと進むべき道は拓かれない。懐徳堂で教え続けられてきたことは「人の道」である。石庵の教えにあったように、今自分が人の為にできることを精一杯行うことこそ、最も尊い行為であることを我々は思い出さなくてはいけない。

企業にも同じことが言える。「人の道」から離れた経営を行う企業は、例え利益をあげていても、その評価に値しない。企業の価値は、地域、社会に如何に還元しているかで判断される。しかし、業績の芳しくない企業は改善策として文化事業からの撤退、支援を縮小するようになってきている。企業の文化事業は、人々に芸術に触れる機会、学ぶ機会を与え、文化を育てるものである。豊かな文化は地域を活性化し、豊かな社会、人を創る。文化芸術活動が盛んになることにより、社会が創造性と活力のある状態を保つことが、企業の経済的な発展にも繋がる。[17]

厳しい時代だからこそ、今我々がすべきこと、本当に大切なこととは何かを見極める必要がある。物質文明から精神文明へと向かって行く新世紀を予測すれば、我々の進むべき道は見えてくるであろう。

人の大切なる宝は、一心の善に在りと知るべし。金銀珠玉は、山の如く積み置きても時ありて尽くべし。一心の善は、一生用いても尽る期（とき）のなきなり。[18]

時代は変わっても、懐徳堂の精神は引き継がれ、人々の心の善意は尽きる事がないことを希望する。

---

[1] 日本史広辞典編集委員会　編　『日本史小辞典』山川出版社、2001 年 p.293
[2] 同上　p.10
[3] 大石慎三郎　『吉宗と享保改革』日本経済新聞社、1994 年　p.100-101, p.205
[4] 同上　p.101-103, p.206
[5] 同上　p.167-184
[6] 産経新聞主催「新・大阪学講座」大阪女子大学大学院　山中浩之教授　資料、2001 年
[7] 湯浅邦弘　編著『懐徳堂事典』大阪大学出版会、2001 年 p.40-41
儒学の古典。　四書（大学・中庸・論語・孟子）。五経（易経・詩経・書経・春秋・礼記）
[8] 同上　「懐徳堂内事記」p.31-37
[9] 脇田修・岸田知子『懐徳堂とその人びと』　大阪大学出版会、1997 年 p.29
[10] 同上 p.29
[11] 同上 p.30
[12] 同上 p.35-36
[13] 産経新聞主催「新・大阪学講座」大阪女子大学大学院　山中浩之教授　資料、2001 年
[14] 湯浅邦弘　編著『懐徳堂事典』「万年先生論猛首章講義（まんねんせんせいろんもうしゅしょうこうぎ）」　大阪大学出版会、2001 年 p.240
[15] 脇田修・岸田知子『懐徳堂とその人びと』　大阪大学出版会、1997 年 p.55-58
[16] 湯浅邦弘　編著『懐徳堂事典』　大阪大学出版会、2001 年 p.161
[17] 高萩宏　「企業メセナとアーツマネージメント－芸術文化を生かす－」(財)民族芸術交流財団　編『伝統文化コーディネーター公式テキスト』そうよう、2002 年 p.146
[18] 湯浅邦弘　編著『懐徳堂事典』「蒙養篇（もうようへん）」　大阪大学出版会、2001 年　p.86-87

参考文献・資料

湯浅邦弘 編著『懐徳堂事典』 大阪大学出版会、2001 年

脇田修・岸田知子『懐徳堂とその人びと』 大阪大学出版会、1997 年

宮川康子『自由学問都市 大坂』 講談社選書メチエ、2002 年

(財)民族芸術交流財団 編『伝統文化コーディネーター公式テキスト』 そうよう、2002 年

日本史広辞典編集委員会 編『日本史小辞典』 山川出版社、2001 年

大石慎三郎『吉宗と享保改革』 日本経済新聞社、1994 年

林玲子 編『日本の近世 －商人の活動－ 』 中央公論社、1992 年

山中浩之『危機から生まれた懐徳堂　中井竹山・履軒兄弟と上田秋成』 産経新聞主催「新・大阪学講座」資料、2001 年